に互り使用可能である。黴毒検査に要するものは、〇・二珪の「ビベット」(カーン氏)二本、〇・九%食鹽水溶液一瓶、働性にせるローレン氏試薬である。

使用法 殘餘の給血者血清は、三分間六三度Cの重湯煎内に入れて完全に非働性となす。次で〇・二珪をカーン氏「ビベット」にて吸ひ上げ、「アグルチノメーター」上に本ビベットを垂直に保ちつゝ、慎重にその先端を觸れしめて、〇・〇一三珪の小滴を硝子板上に滴下せしめる。(この際若し數回の試験を一度になさんとするならば「ビベット」は血清滴下毎に二回〇・九%食鹽水で洗滌し、外部を清淨なる布を以て清拭し乾燥せしめねばならぬ。)而して働性のローレン氏試薬小瓶を振盪し、他のカーン氏「ビベット」にて〇・二珪吸ひ上げるのである。前の如くビベットを垂直に保ちつゝ、慎重に〇・〇一三珪の「アンチゲン」小滴を各區劃内の血清に接して滴下する。かくて「アグルチノメーター」を五分間廻轉せしめるのであるが、廻轉途上三十秒、後尙ほ點滴が混合せぬ時は、廻轉を中斷せざるやう敏速に穿刺針を以て二個の點滴を連絡せしめる。廻轉五分後硝子板を取り出して水平に保持し、その凝集を検するのである。後硝子板を再び裝置して本検査の始めより總計九分間の廻轉を終りその結果を検する。粗大なる赤色毛様凝集は強陽性であり、纖細なる毛様凝集は弱乃至不確實なる黴毒反應である。

本検査法に依る四〇〇に及ぶ血清のローレン氏反應の結果は、カ

ーン氏法の成果が九八%の一致を見るのである。尙ほロビンソン及びスロッド氏等の一〇〇〇人の血清検査成績がカーン氏のもの三七%に於て一致せるを思へば、黴毒の敏速なる検査法としてローレン氏反應は效果的なりと評し得るのである。(青島抄)

戦線及び銃後に於ける「ギブ

ス帯に就て

Dr. G. Kreglinger 述 (Münchener Medizinische Wochenschrift, Nr. 4, 1940)

一九一八年發行の醫學雜誌に、第一次世界大戰に於けるギブス帶の問題が述べられてゐるが、戦争に際しては最初の繃帶の如何が、四肢の救助或は切斷を決定的たらしめ、往々にして負傷者の生命をも失はしむるものである。適應・確實なる繃帶處置に依つて保護されねば戦傷後の充分な手當も無意味である。早期の副木手當即ち四肢の安靜保持は種々の場合に於て炎症の發現を防ぎ、疼痛の消退に效果ありと云はれる。

現時の戦争に際しては、第一次世界大戰以來、航空機に又運搬車に長足の進歩を見るにも拘はらず、今や再び副木・ギブス等の固定繃帶が登場し、その意義の云々されてゐる状態である。

軍醫諸君は、その助力者に對する固定帶技術の指導に努力し、患者運搬者は副木處置に就て熟練せねばならない。要之その技術さ

資材の運用に依り、目的に達せんとする處置方法は様々であることは云へ、期する所は、軍陣外科及び一般外科に於ては、骨折の十全且つ解剖的に正しき位置を求め、その快癒を良好ならしめんとするにある。

第一圖

然し乍らその處置の遂行に當つては、縫合腸線手術用ゴム手袋等々の消費に於けると同じく、戦時下の高價なる資材節約に充分の意を用ひねばならぬ。それは祖國への義務である。未熟なる操作或は不適當なる資材の使用は不經濟たると同時に快癒を不確實とする(第一圖)。

余の言はんところを要約するならば、

一、「ギプス」帶は負傷乃至損傷後直ちに持續帶—纏絡・開放・有窓—をこなす事。

二、「ギプス」帶の結物としては、「ウイン」綿花・メリヤス・巻軸—綿紗—及び縮緬紙を使用し、その症狀に依つては結物なきベレル氏「ギプス」帶を使用する。然し後者の運用には、重大な

る結果を伴ふ循環系障碍の危険に對する充分なる注意を知見を必要とする。

第二圖

三、「ギプス」帶は、靴屑及び木屑板、長壓抵巾としての針金及び紙格子或は狭き「アルミニウム」帶等第二圖の補強に依つて可成り堅固、無壓迫にしかも軽く、又隙間なく作られねばならぬ。通常の灰色非脱脂綿或は白色の脱脂綿又は纖維材による結物は避くるがよい。充分なる快癒に對する確實性はかゝる結物によつては保證出來ぬからである。

四、戦時下に於ける繃帶材料の節約は、熟練せる技術に依つてなされる。

五、時に依り「ギプス」帶内のX線所見を検する必要がある。怠慢は絶対に避くべきである。(青島抄)